

序

谷徹先生は、二〇二〇年三月をもってご定年を迎えられます。立命館大学人文学会は、先生の長年にわたるご功績を称え、深い感謝の意を表すため、ここに退職記念の論集を編んで献呈させていただくこととしました。

谷先生は、一九七七年三月に慶應義塾大学文学部哲学科倫理学専攻を卒業後、同大学大学院文学研究科哲学専攻修士課程に進学され、一九八〇年三月に同課程を修了されました。そして一九八〇年四月に同研究科哲学専攻博士課程に進学され、一九八五年三月に同課程を単位取得退学されました。その後、九州歯科大学講師を経て、一九九四年四月に城西大学女子短期大学部に助教として着任され、一九九六年四月には城西国際大学人文学部に移籍され、二〇〇三年三月まで関東で教鞭を執られました。そして、二〇〇三年四月に立命館大学文学部に教授として着任され、以来十七年の長きにわたり、本学の教育、研究に尽くされました。

先生は、着任二年目の二〇〇四年度、暴力問題を扱う「暴力論研究会」を人文学研究所のプロジェクトとして創設されました（二〇〇七年度まで）。この研究会は、先生が代表者として獲得された科学研究費補助金（二〇〇五―二〇〇七年度基盤研究（B）「暴力と人間存在の関わりについての理論的および実証的な全体研究」と連動して進められたものです。その後、専門領域である現象学を間文化現象学へと発展させて二〇〇八年から「間文化現象学研究会」を、同じく人文学研究所のプロジェクトとして開始されました。これも、先生を代表者とする科学研究費補助金（二〇〇八―二〇一一年度基盤研究（B）「多極化する現象学の新世代拠点形成と連動した間文化現象学の研究」）を基軸とするものでした。このような研究基盤をもとに、先生は二〇〇九年「間文化現象学研究センター」の設置を実現され、その後十年間、所長として世界的な研究拠点へと成長させられました。その成果は、編著の『暴力と人間存在』（筑摩書房、二〇〇八年）および『間文化性の哲学』（文理閣、二〇一四年）として刊行されています。

先生は、暴力論研究会および間文化現象学研究センター、さらにそれらに関連する諸学会、諸シンポジウム、諸ワークショップ、編著作物などの諸活動において、大学院生を参画させ、優秀な大学院生を育てられました。また、エラスムス・ムンドゥスのマスター・ムンドゥスプログラムに二名の大学院生を参加させ、また、プラハ・カレル大学にてエラスムス・ムンドゥスによる授業を実施され、現地で上記学生の修士論文口頭試問に審査委員として参加されるなど、哲学教育の国際化にも貢献されました。

谷先生は、公益財団法人日独文化研究所の理事、日本現象学会の事務局長・理事、日本哲学会の理事、実存思想協会の理事などや、海外の叢書や研究誌の編集委員などを歴任されるなど、学内外での活躍も目覚ましいものがあります。

文学部教授会は、先生の永年のご貢献に謝意を表するため、来る四月一日付で先生に名誉教授の称号をお贈りするよう全学の手続きを進めました。同時に特任教授として、しばらくは引き続き谷先生に教鞭を執っていただけであることを、大変ありがたく存じます。今後とも、文学部、人間研究学域、哲学・倫理学専攻へのご助言を賜ることができますれば、幸甚に存じます。

二〇二〇年一月

文学部長

米 山 裕